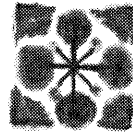


# 心理劇への招待

(四)



鈴木隆子  
中村悦子

ひとは、ひとりひとり別べつで、みんな違った顔かたちや性格や思想をもっています。心理劇は、その似かよってはいるが、違ったものを持ち合わせている人びとの集まった社会を、よりよくするために行なわれていきます。

心理劇における「自発的活動」は、その演者のうちから生まれる新しい活動、それ自体のことではありません。心理劇では、その個人が立脚するその場の情況、つまり、そこでの対人関係の発展する新しい情況に対応して、そのときどきに適切に反応する活動が尊重されます。つまり、対人関係を二者関係的に把握して振るまわれるような、対人関係的に行ってでたらめな行動、思いつきの振る

まいは、自発的行為とはいいません。また、関係の動きのみをおって振るまわれる不統一の自発性も、心理劇をたかめるものとは考えません。

心理劇をとりいれた保育を続けていたある日、はじめての遠足を数日後にひかえて、私たちはこんな試みをしました。  
舞台(保育室の一隅)をあるいて、そこを野原にみたてました。先生のひとりが補助自我の役割をとって、花になり、野原に花を咲かせました。もうひとりの先生(補助自我)は、蝶になって飛んでいきました。

○「さあ、今、どんなことがあったのかしら。」

「はい。」「はい。」

○「そう、お花が蝶が飛んでいったようにみえた人もいましたね。では、広い野原にお花が咲いていますから、みんな、好きなものになっていきましよう。何になるかな。」

「とんぼ。」「すずめ。」「はち。」

みんな飛んでいきました。

○「はい。ここは、広い広い海になりました。海の中には、何がいるかな。」

「鯛。」「いわし。」「蝶。」

「蝶？ 蝶なんか水の中にいないよ。」

「まぐろにしたら。」

○「そう、いろんなものがいますね。好きなものになって、海の中を泳いできましよう。」

こうして、場面転換を、次つぎに舞台の上でしていききました。

○「はい。では、ここにバスがきました。入口はここです。たくさん乗りたい人がいますね。はい、はじめましよう。」

「ぼくが先。」「だめだよ。」「ならばなくちゃ。」「あんまり混んでないよ。」

子どもたちは、バスに乗り、自分たちで考えて、椅子をもちこみ、座席にしました。

「先生の席、ここだよ。」

○「はい、浜離宮につきました。ここでバスをおりて、さあ、浜離宮の門です。あそこに、入園の切符をきるところがあります。だれか先生になっていきましよう。はい。」

○切符売り（補助自我）「はい、いらっしやい、みなさん。」  
「こんにちわ。」

○「みんなで、何人ですか？」

先生役「えーと。」「六人だよ。」先生役「六人です。」

○「はい、六枚。」

こうして、遠足前に私たちが子どもたちに知らせておきたいことと、つまり、乗り物に乗るときや、食事の前後にしてほしいことや、池のそばなどの危険なところで、どうしたらよいか、を舞台の上で子どもといっしょに振るまいながら、体験することができました。

それから、二、三日後に、私たちは、あるおかあさまから、こんな報告を受けました。

「おかあさん、今度の遠足は、浜離宮なんだ、と、とても楽しみにしています。バスに乗ったらどうするか知っています？ と、聞きますので、さあ、と迷っておりました。すると、じゃ、おかあさん、バスに乗ってきて。ぼくが車掌さんになる。私は、生まれてはじめて、子どもと劇をし、子どもの成長に驚きました。」

子どもたちの幼稚園での体験が、おかあさまとの関係にいかされて、おかあさま（相手）を変えていく。そこに子どもの発展的創造的な生活を、おかあさまがとらえられたことは、おかあさまにとっても、私たちにとつても、喜ばしいことです。

心理劇においてたいせつな対人関係の把握については、次のような三つの型のあることを、知っている必要があります。

- ① 一者関係的な対人関係把握の型。たとえば母親が子どもをみるときに、子どもの立場からその子の行動をとらえるのでなく、母親が母親の立場から子どもをとらえているような場合にみられます。
- ② 二者関係的な対人関係把握の型。自分と相手というような立場の分化がみられ、両者が分化した立場から両者の問題がとらえているような場合に、みられます。
- ③ 三者関係的な対人関係把握の型。自分と相手とそれ以外のものという三つの立場が分化して、三者または三者のうちの二者または二者の問題がとらえられているような場合にみられます。

心理劇では、劇を演じながら相互に役割をとりあうことによつて、演者には今までみえなかつた世界がみえたり、自分がよいと思つて今までしてきたことが相手には、自分の考えていたようには受けとられないこともあるということなどの洞察体験をえながら、新

しい対人関係の把握（情況判断）が高まっていきます。そうして、一者関係の把握から三者を越えた多者関係的な把握ができるようになることが望まれます。このような関係把握の体験の育つことは、ひとびとの「自発活動」を促進することになります。

心理劇をしましょう。

—その心得—

- ① 心理劇をするときに、目標を先立てて早急に劇にはいることは禁物。全員が参加してウォーミングアップを充分にすること。
- ② 心理劇の施行前に監督（あるいは補助自我）は、劇活動全体のねらいと計画をたてること。しかし、この計画は、近い未来において演者によってくずされうる計画であるということを知っていること。これは、変更される計画であるということ。
- ③ 心理劇ですることは、現実そのものとは違うということ。役割をとつて自由に振るまうことが許されている。空想の世界が展開すること。
- ④ 心理劇のみ方について。悪い劇はないということ。どんな劇も、一つの可能性としてとらえること。心理劇では、やりなおしてその劇をよりよくしようとは考えないこと。
- ⑤ 心理劇は、万能ではないということ。心理劇にも限界はある。どこでどのような心理劇を行なったらよいか、慎重に考える必要

がある。

⑥心理劇では、今・ここ、を尊重し、もしならばの態度を、監督をはじめ一同が、尊重すること。

⑦ひとつひとつの発言、ひとつひとつの行為、一連の関係の発展を大切にすること。

⑧心理劇関係では、ひとりが変わることはその関係の担い手全部の関係体験が変わることを意味しているということ。

⑨心理劇での失敗かどうかは、関係内に、関係の脱落者が生じていないかどうか、手がかりになる。

⑩心理劇は心理劇を生む。人と人とを結び、対人関係を育てるということ。

⑪きめてかかると間違える。関係の発展に即した個人における方向性の決定を尊重すること。

⑫心理劇では、ひとびとが劇をすることによってその場への適応を越えて創造的活動がもたらされることを期待しているということ。

⑬心理劇では、階級の上・下、性差などにまつわる特定な役割に規定されないで、情況に応じて生き生きと振るまえるということ。また、演者が、監督的な役割をとって、その場の関係に働きかけながら、その変革につとめることもできるようになれる。

⑭心理劇を發展するのに重要な役割を演ずる補助自我の養成を、

監督は劇の中でたえず心がけていかなければならない。ひとりて劇を進めようとする態度は、慎しまなければならぬ。

### 劇化の技法

心理劇に主として用いられる技法には、次のようなものがあります。しかし、これらを、いつどこでとりあげて使用するかは、監督にまかされています。どのような情況で、どのような目的のために、どのようにとり入れていくかは、いくたびか劇体験を重ねていく中で明らかになることでしょう。

#### ① 再現法

たとえば、先生の見えないところでおこったケンカを、もう一度、劇のかたちでする。それを観客が批判し、さらに、そのケンカの結末を、劇の發展の中でつけていく。こうして振るまうことによって、ケンカをどうさばくかについて問題をあきらかにするのではなく、ケンカの動因の発見や、ケンカに対処する仕方の可能性をひろげるところに、そのねらいをおきます。しかし、この方法が誤用されて心理劇の本筋からはずれ、「おしつけ劇」になることがありますから、気をつけましょう。ケンカを再現させることはできません。ねらいは、原因の診断制裁におくべきではなく、演者が劇体験を通して、新しい洞察をえて、次の機会に振るまう可能性がひろげられるようにしましょう。

## ② 軽減法

あるできごとに人が遭遇したとき、ここでどう振るまったらよいか迷うことがあります。このようなせっぱつまつた事態を、どう乗りこえていくかに役立てるのに、軽減法は効果があります。危機の状態を直接そこに用意するのではなく、たとえば、子どもが一千元持ち出した、そういうときに、どうしたらよいかという事態で、それではその金高が一円であればどうするだろうか。そのときの周囲の扱い方を、劇であきらかにして、好ましい人間関係をくずさずに、しかも適切なその事態への対処の仕方を見出していきます。

## ③ 加重法

新しい事態を用意し、そこで自発的に振るまうことをさそいながら、新しい事態の緊張をさらにたかめていく方法です。たとえば、子どもに手紙を渡して、それを友だちのところへもつて行く。相手を友だちから、おばさん、先生、校長先生というように、かえていくことなども、加重法の一つということができます。

また、劇の進行にのれないでいる参加者に、一つの役割を与えて、すぐまたその役割に、役割を重ねて与える「役割加重法」があります。はじめに「おかあさんになって」と言われて、緊張がたかまり一瞬とまどつた後で、「ここにあるお膳を向うに運んでください」と言われて、ホッとした気持ちで行為してしまふ。それによって、おかあさんの役割はとれてしまふというような効果があります。

## ④ 重畳法

軽減法や加重法では、漸近的な方法が主として用いられますが、重畳法は、段階をとりこえて、たとえば緊張をたかめ、次に、それよりも低い緊張の場に立つように操作して、効果をあげる方法です。

たとえば、母親が外出する。子どもが泣く。おとうさんといっしょにいきましょう、と父親が近づく。子どもはいっそう激しく泣く。この父親は、子どもとの接触の機会が少なく、子どもになじんでいません。じゃあ、おばさんがいるからいいでしょ、ね、いっしょにあそびましょう、と、おばさんが近づくと、子どもはどうか泣きやみません。そういう場合に、母親の外出で、子どもが泣くとき、すぐにおばさんが出て泣きやまないかもしれない。ところが、父親がまず近づいて次におばさんが近づくことによって、泣きやむようであれば、これは、重畳法を活用して成功したということになります。緊張の階層（力の場の重畳）を活用する方法です。

## ⑤ 唯一法

一つしかないものを二人でわけなければならぬというような事態を構成して、そこでの振るまい方を導き出す方法です。この方法が活用されれば、日常生活でのいろいろな問題を解決する態度を養うことができます。

一人しかない母親をめぐる、きょうだい三人が争うような場

合や、ものの奪い合いからけんかになることの多い家庭の問題などを、説明するのに、役立つでしょう。

#### ⑥ 初発法

問題がこじれているのは、そこで関係し合っている人たちの過去の経験にたよって思いいいにその問題を解決しようとするからである場合が多くあります。このような過去の経験を否定して、新しい発見に導くためには、経験したことのない役割を与えることが、効果的です。直接には経験したことがなくても、概念的には知っていることが多くあります。そういう場合に、「初発法」を活用して、効果があります。この世の中で「最初の先生」といわれるような人を演じる。ありきたりの先生ではなく、最初の「その人」は、どうであったか、それを演じることによって、経験のわくから脱して、創造的な役割演技を導きだすようにするのです。

#### ⑦ 中断法

劇の進行を中断します。これは即興劇の場合、しばしば使用して効果的な方法です。

ストップをかけて、それまでの劇についての話し合いをまじえたり、役割交代を行ったり、中断した先を続けるようにします。筋書のある劇で、劇化をはじめて、中断し、そのあとを自発的に発展させていくことなどにも、役立て得ますので、活用範囲が広いといえます。

#### ⑧ 両極法

両極的な性質の劇をすることによって、これは主として観衆に、洞察の体験が生まれるようにする方法です。

#### ⑨ 鏡映法

演者（患者）が演じにくい場合に、この方法は多く用いられます。演者は舞台からおりて、他のひとが演じるのを、観客席から観客の立場でみます。

演者にかわって演じるものは、補助自我または、補助者の役割をとって、演者が「劇の鏡」にうつる自分をとらえやすいように振るまいます。演者に、今、行なわれた劇についての意見や感想を求め、要求に応じて新しく劇を発展させ、観客が演者となって、劇に参加できるようにします。

鏡映法は、治療の初期に用いられることが多いのですが、劇のゆきづまりを打開する扱法としても用いられます。

〈参考文献〉 松村康平著 心理劇 対人関係の変革 誠信書房

〈研究会〉 心理劇研究会、お茶の水女子大学家政学部児童科

児童臨床研究室

毎月第二、第四土曜日、午後四時から七時まで